

精神分析は子どもに注がれるまなざしを変化させた。それは権威とその濫用をめぐる数多くの葛藤に平和をもたらした。子どもは完全にひとりの主体である、と、精神分析は認めさせたのだった。この表現はしかしその後心理学のはけ口になってしまい、今日人はこれらのスローガンー子どものパロール（ことば）を教育的展望の中心に置いた、パイオニア時代のある精神分析のスローガンーの倒錯的な諸効果を目の当たりにしている。

私たちの時代には、子どものパロールはしばしば神聖化されている。このことは何らかの結果を引き起こして、いかなる禁止、いかなる罰則も与えないのが子どもの権利となるほどまでに幅をきかせている。パロールと共感によって取り扱われなければならないとされているのだ。

「すべてを言う」ことの畏

確かに、子どもの分析家は子どもがセッションで言うことに根源的な重要性を与えるものである。しかしながら、子どもと大人のコミュニケーションすべての領域に広げられるような、ひとつのモデルをそこから作るのは適切ではない。親と精神分析は同じ理由で格闘しているのではない。「すべてを言う」角度からの関わりは、子とその親の関係にはふさわしくない。

親が子どものすべてを知りたいと願うとき、すべてを言う（全部話す）ことを子どもに要求する。しかしそのことと、分析家がそのように子どもに誘うのとは、違うのである。まさに分析家は子どもにすべてを言うことを要求しない。そうではなくて、頭に浮かぶことを言うようにと要求する。このふたつは大変違うものである。一方は真理を求めていて、他方は未知のこと、まだ分からないこと (*non-su*) を要求する。一方はひとつの絶対知を要請し、他方は子どもの症状を探しに行く。かりに子どもが両親に真理を言うとみなされているのであれば、それは親に依存しているからだが、子どもは分析家にはまったく依存していない。分析家も子どもの言うことを信じているが、それは子どもが話しはじめ、子どもがなぜ会いに来たのかが分かるや否や信じるものである一つまり、指示する者に言われたとおりに子どもが話すからではなく、子どもがうまく行っていないことを話しているから（もちろん、この概念は子どもの年齢に応じて変化するものであるが）、信じるのである。

パロールのヴァリテ (*varité*)

ラカンがヴァリテ *varité* という造語を作ったが、それは真実 *vérité* と多様性 *variété* を合わせて言うためである。このヴァリテは、真理が多様に変化するということを理解させるものである。それは子どもにかんしては認められないように思えることである。いったい子どもにとってはどのような真理が問題になっているのだろうか？なぜ子どもは真理に直接に接近できるのだろうか？もし仮に子どもたちの口から真理が飛び出すとすれば、それはしばしば大人が隠した真理である。子どもは親が隠していることを言う。子どもは大人から聞いたことを繰り返し言う。子どもはこの知に享樂し、とりわけパパとママのあ

いだで言われることに享樂し、そのとき子には全能感が与えられる。口に出されてはならないこのパロールは証人のパロールで、真の対象 *a*、*剰余享樂 plus-de-jouir* であり、子どもがそれらの保持者である。両親はときおり仮面が剥がされることになる。そして子どもが嘘をついていると叫ぶ。真実であろうひとつの事実のリアリティーにかんする正確性とは反対に、真理とは、つねに主観的なもので、それ自体確かめることは難しい。そのせいで子どもは真理を言っているのに、その子は嘘をついていると告発するという苦境が生まれる。

本当の嘘をつく *Mentir-vrai*

子どもが嘘をつくことは、子どもが真理を探し求めていることをむしろ示しているだろう。＜他者＞が知っているのかどうか知りたいと思っていて、そのためにそれを確かめるためにでっちあげを語る準備があるのだ。子どもにおける嘘とは、＜他者＞がすべてを知っているわけではないことを見定めるのに役に立つ。子どもがこの経験をするのは本質的なことである。多くの親はそれを理解していない。他方、子が嘘をつくことは親にとって、子どものパロールが神聖化されてはならないことを示すが、根本的にはおそらくは（本当らしくは *vraisemblablement*）本当であるひとつの真理から来ていると了解されるべきであることを示している。おそらくは（本当らしくは）とは、「欠如が欠如していることが現実界を作り、そこからは栓しか出てこないⁱⁱ」。この栓、これは言うことが不可能なもの（*l'impossible à dire*）であり、あらゆる本当らしさと二律背反的なものである。真理を言うことは、それが子どもの場合であるならなおさら、＜他者＞がそれを要求するや否や、しばしば真理を否認することとなる。嘘をつくのはその場合ひとつの防衛である。本当の嘘をつくことⁱⁱⁱが、ひとつの回答のように出現する。それは意味を持たないものである。多くの大人たちがそれを解釈したがって誤りを犯してしまう。

今日、多くの親や教師らがハラスメントや濫用の問題と格闘していて、パロールがかつてなく解釈されている。子どもはすべての真理との関係で解釈されている。舌足らずの語でしか語られないことが、捜査の理由となり、パロールを自白に至らせる。子どもがハラスメントを嘆いたり、被害者であると言ったりするたびに、そのパロールは即座に本当のものとなみなされている。それを疑うことはあやしい不信のように思われている。そうなってしまうと、解釈が、一連の罪のある者たち同様、被害者を製造する時代となり、真に語ることはもはや可能ではなくなる。本当の嘘をつくというのが、すべてを言うという欺瞞から逃れるひとつの解決策となるだろう。

ⁱ Lacan J., *Le Séminaire, livre XXIV, « L'insu que sait de l'une-bévue s'aile à mourre », leçon du 19 avril 1977, Ornicar ?*, n° 17-18, printemps 1979, p. 14.

ⁱⁱ Lacan J., « Préface à l'édition anglaise du Séminaire XI », *Autres écrits*, Paris, Seuil, 2001, p. 573.

ⁱⁱⁱ Cf. Aragon L., *Le Mentir-vrai*, Paris, Gallimard, 1980.